

△翻刻▽

蓑笠の日記

池田 勇

本書は故田中重太郎博士ご所蔵の写本で、縦二十三・八センチ、横十五・六センチの袋綴で、題簽は、はがれている。墨付四十四枚で、本文四十三枚と奥書一枚とから成る。一枚目は「春曙庵主」の押印がある。田中博士が壮年の頃、購入されたものと思われる。表紙と一枚目とは左下の一部が欠落している。各枚は十三行から成り、一行は二十七、八字前後書かれているが、和歌は一字下げ、別行に書いてある。

作者は四十三枚の日記のあとに、「なからぬわか世つくさむ竹の杖 この一ふしをおもひ出して 隠士閑哉」とある。四十四枚の奥書には、「此日記よみはてたるに更に須磨のうらのわたりをくりかへされて おとにのみさくをうらみのすまのなみ うちかへしつ、おもひこそやれ 夏蔭」とある。「蔭」は一部虫損で、推定。）前田夏蔭と思われる。仮名づかい、漢字・仮名の区別などは原本どおり忠実に活字化したしたが、漢字は一部新字体としたところもある。

蓑笠の日記

又かゝることやはある此をりなすこしそなとせちにのたまはせつ、よろつの事君せさせ給ひて出た、せ給うければ只夢のやうにてなむたちいてぬる

いかてかも旅行せまし竹のつゑみのよ笠よと君かきせすは

そも此君と申はおのかよはひの末に身をよせてこのもかものかけはあれともなく頼み奉れる青き山辺のかうのとのになむありける此君津の国武庫のあたりをしらせ給へれは大かたとし毎にけいしはし給ふそのあかた見と、もに出立て日ころゆかしかる須磨あかこよかしの仰言年有けりおのれあやにくにえさらぬしけくてけふまでえしもゆかさりつるにこたひはそのついでよき友なれはとふりはへてのたまひつ、いつまで引しろひたはひもかたふきぬとくせすは日も暮ぬめりなどおとろかしたまふにそ実にかなりと思ひおこしていて立ぬる事とうくひすその、師のかりいきてさをしかの津の国まであわた、ぬるよし告まゐらせ

ぬさをたにとりもあへすて旅衣かたにとりかけた
冬かれのあしの言の葉かきつめてなにはのつとにたてまつ

をりふし師はやむことなき御館にふみかうしにまう昇りぬとておはせさりけり長月十よかの日御いとま申に君のみたちにまゐりぬれはみこゝろしらひとりにおほみきおものなとをりにあへる御まうけともにてたまはすいともく辱き心のうちにかくなむ

海人はよしいかにつくとも心にはいかてかおひむきみわすれ草

同じ日の夕つかたかの津の国へいさとさそへる人のかりいきて宿りぬこは桂月庵宗理とてはやくよりの友なるかことし世をのかれかしらおろしておのれにひとしきいとま人なり其夜そのいへの家あるしうまのはなむけに哥よみていたせりそのかへしにはあらで

難波江のあしからめともかきつめてことの葉のみやいへつとにせむ

十五日の晩かた二人ともすみ染の袂かるけに立出ぬおくりの人これかれあり品川のすく過る比よし田かな井の二人別れをしまむとてまちつきたり思ひかけねはいと嬉しく海辺のいへに立よりてかはらけいたせり二人より哥をもおくれるかたちいそきに心あわた、しけれはかへしはえせず今はし盃す、めてわかれをしまくおもへれと今日ゆき給へる道もはるけきにとて二人は心して逃るやうにはしりいて、見えすなりぬ実にはけさは時もおくれにたれはとて□を立出なからもそのわかれをしまるればかへりみかちに

浦なみのかへすくもしのふかなつらきに似たる人のなざけを

大森の里過るころより俄に風落雨降いて、いにし夜の野分の如降しきればいとくあゆみわひたりあまきぬはものせれともしと、にぬれにぬれて

天さかるひなの長路のたひなれはいとはれやすする雨もあらしも

と心にねんしてやうくく六卿の渡りこゆる比雨は降やみぬけふは戸塚までもとこ、ろさしつるに雨にさはりて道はかとらす程かやのすくに夕暮たとり着てやとりぬ

十六日夜をこめていつしなの阪にて月いとさやけきにうす雲よきほとにたな引て富士のねうすくろうみゆるを

不二のねのすかたさやかに長月の有明の月のかけに見るかな

けふは小田原までゆかまくおもへときのおおくれにたれはけふ又おくれで大磯の里に心ならずもまくらをゆふ十七日夜をこめていつるに有明の月いとさやかなりいにし八月廿五日の夜江門にてもいみしう野分して大木なと吹折ぬるかこたび立出てみれば道の辺の並松は江戸にも立まさりていくとせ経にけむこよなき大木ともなかはよりねち、きりたらむやうに吹をれあるは根こめにうちかへりたる見る目もわひしく疎まし

とし高き松のちとせを幾千本吹くたく覧あきのやまかせ

酒匂川をこえて箱根山のほるにていけいとよし日のみしかくなりにたれはやう／＼に夕つかた関こえてたうけの旅屋に宿りぬ湖水の辺りなれは見たしをかし其うちみるさまを

うすく濃くかさなる山そなみたてる箱ねのうみの秋の夕なき

十八日暁かた立出松の火ともして山をくたるにはたこもたるすさのあれき、給へ鹿のなくはといふさなりやと耳と、むれは遠かたに細き声して二三声なきぬいと嬉しくて

玉久しけはこねの山のあけほのにはのかにき、ぬ小男鹿の声

たとりこし山のかひよと箱根ちに嬉しくもきくさをしかのこゑ

富士見たひらにおりたちぬる比は夜明はなれてそらには塵斗の雲たになくしてかの不二のね類ひなくはれたり友なる宗理のよめる

そらはれて残れる月といつる日のひかりにしらむ不尽のしら雪

おのれも

幾度かゆきかひみれと見る毎にいやめつらしき山は不二のね

からやまと山てふやまの王とあふか散らめやこのふしのねを

原のすくに来てまちかく見むとおもへるをあやにくにみねは雲か、れり

箱根路にけさしもみすはうき雲のはる、かたなき思ひならまし

ゆき／＼て峯のみすこしはれぬるを

おほきみの大御顔こそいてませれ雲の戸帳をしはしか、けて

こよひはよし原のすくに宿りぬ

十九日富士川をわたりて由井のうら伝ひし倉沢の汀にいこひて酒たうへなからうち見る儘を長哥につらぬるかふた、ひかうかへもせされはいとあしかり

うちよする駿河の海のはまつ、らくるしき旅も倉沢の浦の磯屋のおはしまにいよりか、りて見る時はわすらえにけり打向ふ海のおもては藍の如たつしらなみは雪のことまなくよせきて岩かねに玉ともくたけ花としもちり乱れけり名に高き不自のたかねはうしとらのかたにそひえて天雲もいゆきは、かり峯まではかくしもはてす中空にあらはれて見ゆ足引の山辺のうしのうちいて、見さけましけむなにたてる田子のうらわはこのあたりかも

反哥

ひんかしのうなひの道のゆくさくさこ、をせに見む不二の高嶺は
くれ過るころに府中のすくに宿りぬ

廿日朝とくいて、阿部川わたるうつの山こゆとて

紅葉するつたもかへてもなかりけり秋のみふかきうつの山みち

大井川水深けれとことなくこえて金谷たうけをこゆくたれはきく川の里なり

菊川の秋なつかしみきてみれはましるに咲るそは麦の花

さやの中山をこゆとて

なよ竹のつゑをちからに今は我もたらぬ太刀のさやの中山

今夜は日坂のすくにやとる

廿一日日坂をいて、ゆきく／＼て天竜川をこゆ此比はみかさまさりて一瀬と成ぬれは海のやうになむ見ゆる舟さすまいと長し

みそらとふ鳥ならなくに久かたの天の中川こゆるけふかな

夕暮はま、つの里に人よりおそくたとり着て

たひつかれ杖をひくまの宿りにそたとるくも我は来にける

廿二日浜松をいて、舞坂より船出してあら井の海をわたる浜名の橋の跡いつこなるらむゆかしけれともとひ見む人たにもなし

それとたに跡しわかねは橋本の里のなのみそしのはれにける

友なる宗理もよめりとてかたりし

いにしへの浜名のはしのあと、へはこころにかけてしる人もなし

こよひは赤坂の里にくれ過てやとりぬ

廿三日赤坂をいて、藤川に至る道すから二村山の事思ひ出て朝とく起いてたる老人にとへはそは今まへを過させ給ひつる法蔵寺のあの御山こそ則二村山には侍れかの御寺の山号もまさしく二村山といふなる物を山一つにて里二村へか、れ、はさなむいふなるよしをいとねんころにをしふめりさなりやとかへりみすれば

朝日子のかけほのめきて横雲のみねにたなひく二むらのやま

此二村山の事いかにかあらむいさよひ日記にはふたむら山をこえて八橋に宿り給へるやうに見えぬればさあれはこ、にはあるへからすなほよく人にさかまほしけれとしらすてふ人のみおほくして此法蔵寺程たにもをしふる人はまれになむありける矢作の橋はさきつとしの大水に流れて橋話のかたはかりはつかに残れり

なかれつ、いつちにいにけむ梓弓やはきのはしは跡かたもなし

宮のすくに暮過て宿りぬ

廿四日みやより船出して七里の渡りこゆる船の中いと長し

山鳥のをはりと伊勢のなかつ海舟路なかくもおもほゆるかな

未の比にもや有らむ桑名に船はて、四日市のすくに暮ぬまに來りて宿りぬ

廿五日れいの夜をこめていてつゝ、いそくに関と坂の下のあひたに筆捨山といふありこはかの、古法眼山のさま筆にもおよはしとてふてを捨られしとなむ実山にのた、すまひいとをかしう岩かねよき程にそひえておふる木とも、造りなせるやうによしはみたり前の茶屋に尻かけてうちあふきつゝ、いかて一哥によひ出はやおもへれとよみえさりけり

古人の筆捨ぬてふ山みれはことの葉さへもなけうたれけり

ゆふくれにすゝかやまをこゆとて

ぬは玉のよるはこえしとふりはへていそくうまやの鈴鹿山かな

山陰のあさちに虫のねの残りたるを宗理

なく虫はそれとわかかねと鈴鹿山ふりすてかたきゆふくれの声

すゝか河は麓になかれたり

もゝつたふ八十瀬のなみのおとまでも聞によしあるすゝかゝはかな

今夜は土山のすくに宿りぬ

廿六日夜をこめて立出水口石部を過る比三上山よく見えたり

みやこ人また見ぬ不自を此山のすかたにのみや忍ぶ成らむ

草津の里にくれぬまにたとり着きてやとりぬ

廿七日宿のあるし時をたかへて早くいてたたせぬれはゆけ共く夜深し瀬田の橋またくらきにわたる

ふみならずえには有けり年久にき、渡りこしせたの長橋

此はしのほとりに人のおきゐる家あれはしひて入てはひりのかまとに柴折くへ火にあたりて夜の明るをまつやうく
しらみゆけは立いて、宗理

こ、にきてせたの長橋なかき夜もや、明渡るにほの海面

となむよみける誠にありのま、なるかいとをかしとそみぬ石山寺にまうつる比夜あけわたりて湖水のさまえもいはれ
す二王門をいれは南方になみたてる紅葉半染たり

いし山やよへの時雨の一しほはこすゑにしるきもみち葉の色

御堂にまうて、山のうへよりみつうみを見さくる比にをりよく朝日さしいてたり此けしきえしもいはれず

鳴照やいし山寺のあさ日影秋の月にもおとりやはする

粟津の原義仲寺にまうて、水海の辺りを過るにていけよければ名に高き見渡しの数も大かた見えわたるはかり也大津
より三井寺にもまゐりぬいつこもくとりくりにけしきいはむかたなし名にひ、きぬるふるき鐘なとみめぐりて追分
よりをれて伏見へゆく此道いと遠かりけり京橋の辺りなる旅屋にいこひて亥の時比より船にのりて夜の衾引かつき
つ、船の中に寝なからにゆくめり

浪枕一夜ふしみの夢のうちになにはに通ふ淀の川ふね

廿八日暁かた難波の八軒家に船はて、それより伏見町なる加賀屋何某のかたにいきてこ、にしはし足をと、めぬ此家
あるしおのれこそはしる人ならね友なる宗理はもとよりあひしれる同し業の友かきなれはかたみに心もおかすかたら
ひあふおのれ迄もいと馴安けなり其日は清らなる庵の炬火のもとに茶をのみ酒くみかはしめつらかにかたらひぬ

廿九日このいへあるしのなりとこ細嶋てふ所にいさなはれて行ぬこの所のさま前は淀川の流れにして水いと清く門

の前に舟をつなきうしろは田面はるかにうちひらけて都へ通ふ街道の松原立つ、ける末に生駒山まちかくそひえたり居なからにしてうち向ふ見わたしえもいはれすこ、に夕暮まであそひて盃めくれるま、に哥よめとあるしのもとむるいなみかたければそのうち見るま、を

ことの葉にえこそ尽さね細島の目に（余りぬ）る（こ、の）けしきは

千町田のすゑにつ、ける生駒山きみかそのふの物とこそ見れ

夜にいりてふし見まぢの家に帰りぬ

卅日けふは住吉に詣はやと宿よりあないの人求めて道頓堀生玉の社なとゆくてのついでに見ありきてまつ天王寺にまゐりぬ名にたかき御寺なれば太子堂をはしめて堂塔残りなくこ、かしこに詣ありき名に流れたるかめ井の水をもみてくみそめてたえぬ亀井の法の水万代ふともかれしと思ふ

是より住吉へゆくにけふは御神事とてまうつる人いとおほかり天下茶屋のあたりよりは諸人袖をつらねて道もさりあへすさて住吉にいたりてみるに深緑なる松陰にあけの玉垣神さひておはします四所のみやゐにまつまうて、ぬかつき奉り猶末のみやしろをもこと／＼にかみめぐりつ此あたりに浅沢沼とて石ふみたてるさはも有けりこの宮居のおまへを浜辺のかたへゆく道松なんいとしけかりける是を岸のひめ松とはいふなりとそ今は海遠うして木のもとにはす、きちかや生茂れり思ふにはたかへる心ちせられて

住の江のきしの姫松きてみれば尾花の浪そかせによりぬる

浜の高とうろなど見ありきてみやしろのかたへ立かへるに折よくも御輿出させ給ひにけりあまたのね宜楽人らおのもく／＼清らにさうそくして楽を奏し反橋をこえさせたまへる粧ひいともたふとかりきさきいみしうおはせてかの津守殿にや有らむくろき袍の束帯して真砂路に裾を長く引狩衣すかたのね宜おほくしたかへてみこしのみまへにねり給へる

はいとよき見物になむありける月日こそおほかれかゝる日にをりよく詣あひぬるおのれらか身のさちをよろこほひか
しこみて

住の江にえには深しなめぐりきて詣あひぬるけふの神業

此あたりの茶屋に憩ひて例の酒たうへおものなともせるまに日は暮はてにけり帰りくる道すからもいと賑はしうて
ことに心齋橋のとほりなむ歩みくるしきまでに人多くゆきかひぬる高き屋の大御哥もけにと思ひ合せらるゝにこそ
かなな月ついたちの日兼てより心にかけてる須磨明石見はやとうちつれて立出ぬるか友なる宗理はこゝちあしとて尼
か崎より難波にかへりぬかう思ひ立ぬるうへはとおのれは引わかれてゆく西の宮なるひるこの宮にまうて、

もろ人のねかひは、やくみちぬらむ汐のひるこの宮居なりとも

兵庫へゆく道に東明村といへるありそこになんかの処女塚はありける

住わひていく田の川のみなわなすきえしをとめのおくつき所

新田よし貞あその命にかはりて討死したる小山田高家の石ふみも同じ塚のうへにたてり

玉きはる命をかるく小山田のいな葉の露ときえ果にけむ

見ぬめの浦には敏馬の杜かみさひておはします見渡しいとよきうらなりけり

いかにして見ぬ目の浦といふならむうらのみるめはしけかる物を

生田の杜をとふに梢うす紅葉して遠の見渡しいとをかし行てみれば広前にすまひ有て里人ら数多つとひいとらうかは
し名にたてる名所なれは見過しかたくて

色浅きいく田のもりのうす紅葉また秋にとふこゝちこそすれ

湊川の辺りなる楠公のおくつきにまうてぬる比ははや暮かたになりぬあかしよりの帰るさにし給へなとすさはいふめ

れとまつこそとて行てをかみぬ稲葉色つく小田の中に松のあらしのおと斗して夕辺のさまいと哀なり

おつつきのみまへかしこみぬかつけは覚えす袖にちる涙かな

武士の数としならばこゝに来てなみたおとさぬ人はあらしな

兵庫の里に暮過てやうくたとり着ぬ

二日朝とくいて、けふこそはゆかしかりつる須磨をも見めといそきてゆくにいと足かろしさですまに至りてみるに実
に海はすこし遠うして立つ、ける萱の軒端いとかこかに物ふりたりいへ毎にかの簾かけわたしたるはこゝ里にはあら
ぬさまなりまれにはいらか屋の立まじりたる是なむ此里のくまなりける何中くにかゝる事しいたしにけむいからか
やはかりはこほち捨まくそおもふ

こともなき村里なからきてみれば心つからやすまはをかしきふる簾かけわたしつゝ、里の名のすまひよしある賤か家
くわひしけに見ゆる家ほとゆかしくて須磨はをかしき里にさりけるあはれわか心まゝなる身なりせはすまはまほ
しきさとそこの里

けふそ見るあはれいくとせ心にはかけ、るものを詠磨の浦波

すま寺は松原三町余り奥まりて二王門あり中門の額はいにしへの馬盃となむいふめる木にてありぬきたる物とみゆる
かいとくされ朽てふしなと処々ぬけたり文字もあなるかきえてみえずすへて堂舎いたくふりて物さひたり若木の桜
はいくたひ殖継にけむ誠にわか木にてそのもとに朽たるふる木なむ残りける寺に伝はれる古き什物をも僧にこひて
見つるかうへくしきものとしもおもほえねはしるさすうしろの山手につきて一の谷のかたへゆく道に敦盛の首塚て
ふ物ありちひさき五輪の塔のまへに笛形したる竹をあまた、ておけるは此あたりの里の児のねき言してかなへるふし
には奉るにやあらむと思はるゝこゝより街道へいて、一のたに二のたに三の谷てふ所をゆくてに見つゝ、こえぬこは山

とく／＼のあひたをそいふなる鉄枋が峯鴨越などいへるは其山のうへにして三の谷のあたりならむ大きな五輪の石の塔ありこれを里人は敦盛の墓とそいふなるまへにそは麦ひさくあやしの小屋有てあつもりそはたうへ給へとゆき、の人をよひと、めてす、むめりおのれも立寄りてものしつるかいとあしかりけりこ、を過ぬれば津の国と播磨との境川有垂水とかやいへるあたり北の山手につきて仲哀天皇の御陵といふあり人のをしふるま、に行て見れば小高き岡山にして山のうへにちひさき石のみやしるありそを、かみてあたりをみればわたり一尺あまりの壺をひしとめくり埋みたるか土よりあらはれて処々見ゆ是を里人は千壺とそいふなる此たるみを過てしはしゆけは舞砂の浜なり松原八丁斗下は真砂路にしていと清らに浪た、こ、もとによせくめり松のさまとりすかたをかしう造りなせるさましておのつかから一かたにかたふきたり里人は都のかたにかたふきぬといふさなりやこの舞砂に鶴屋といへる家ありこ、に憩ひて庭のあつまやに尻かけて海原をうち望むにそのけしきなにとしもいふよしなむなかりける

沖つなみ雲井にまかふわたなかに一つそうかふ淡路しま山

まな先に手にとるはかり淡ちしまあはれ近くも見えわたる哉

その嶋のうちに松の一村こもりて見ゆるはかの松ほの浦とそいふなる

こ、に來てけふこそみつれ名にたかき松ほのうらの浪の夕なき

こ、に酒たうへおくれにたれと昼のおものなど物して首にかけたるかたまの茶をとりいて点してあるしのおきなにもあたへおのれものみたるいとく／＼おもしろう、まかりさいにし年わか友よし田の何某こ、に一夜宿りたる事ともかり出ればあるしもよく覚えるてけにさる事こそ侍りつれいまにことなくおはするやなといとなつかしけにかたらへはいさやそのちなみにおのれもこよひ宿し給へとしひて契置つ、あかしなる人丸の宮居に詣つ大倉谷の町のつらよりは奥まりて小高き山のうへになむしつまりいませるいかめしきみや造なり広前にぬかつきて

ともしひの明石の浦に此神をいつよりかもやいはひ初けむ

山のうへより海つらを見わたせは松の葉こゝにあはちしままちかく見えて帆影あまたゆきかふなと絵にか、まほしきけしきなりとかくするまにくれ初にけり

あかし潟なみの夕霧たちわたり淡路のしまぞ嶋かくれ行

これよりの舞砂にかへりて宿りぬその夜はあるしのうつみ火かきおこし炭さしそへて此比はあしのけになやめるよしにてうまこのをとめに茶をたてさせぬるか思ひしよりは目安かりけり夜すから酒のみ物かたりして亥のとき過るころあるしもふしとに入ぬれはおのれも枕をとりてしはし夢を結ひぬ

三日暁かたより雨降いてぬれは浦のけしきもきのふには似す此宿をたちいつとて

ちとせふる鶴のねくらに宿かりて松の根まくら一夜ねにけり

淡路島あはれきよくもたつる茶のふり捨かたき余波をそ思ふ

たさくにかきてあるしにあたへて立出ぬおきなも門のとにおくりいて、此世にてはかたみにたいめはかなふましおのれまつゆきてかの国にて待奉らむおはせよといふけにさなりく又そのをりにこそゆる、かにかたらはめとて立出るもをかしよへより雨降いて、さのみけしうも降されともをやみなければ雨よそひものしていそくにゆくての海原に白浪高くうちよせて磯きはに千鳥の数多むれぬたるはうつし絵になむ似たりける

打よする浪のしらすのはま千鳥おりあるもありむれ立もあり

ゆきく／＼てはやもすまにいたりぬかのこゝろと、まる里なれは折からのさひしきさまを

須磨寺の鐘のひ、さも打しめり小雨そほふる里のしつけさ

さひしきは秋たに暮て冬の雨の哀ふりそふ取磨の浦里

源光寺にあなる風月菴似雲の古跡なときのふ見残したところくは立よりて見つ帰るさいそく道なれとも只過かてにのみた、すまれて

すまの浦やまたいつかはと思ふにそかへりみかちにあゆみ兼ねる

雨雲にうしろの山そかくれゆくちたひも、たひかへりみるまに

兵庫に至りて平相国のきつき給へる築嶋寺にまうて浜辺にいて、見渡せは和田の御崎の松原いと長う海へさし出たりいにしへ建武の比本間の孫四郎遠矢にみさこを射て誉れをあらはしけむもまさに此処の事なるへしかへるさに又楠公のおくつきにまうつをとつ日は夕くれなれは見えざりし碑面の前後をもをかみ正成あその束帯の御像なとけふは残るかたなくぬかつきて

玉くしけ二こ、ろなきもの、ふのこれや誠のか、みなるらし

石をなす楠の大樹の万代も朽せずたかき君の御名はや

布引の滝見むとて生田の杜のかたへより山かたつける道はるくくと分入てかの砂山によちのほるにあやにくに雨さへ降そひてわひしさはいふはかりなしされともけふ見すはいかにくやしからむといく度か思ひ起しつ、つゑをちからにけはしき山道ふりはへてのほりゆくに老てはいとくるしかりきからうしていたり着てまつうち見るにき、しは物かとおとろかれぬあたりは山聳えて松のみしけくおひかさなれるかいとするととき岩かねのあひたより只白緒を引はへたらむやうにみなきりおつめり古しへより此滝にはいくその人のことの葉をか残しけむ世に流れて名にひ、きぬるいとおほければ今更にいふよしもあらね共雨にきそへるたきつせのさまを

降しきる千筋の雨のいとそへて広はたにおる布引のたき

なにとかや繰かへしなほいはまくおもほゆれとこの雨には山たつのひ、きもたえていとくものすこければ心残して

山をくたりむつかしけなる小田の中道かなたこなたと人にとひつ、やうく人にゆきかふ大路にいて、それよりひたふるに道を急ぎ西のみやにたとり着しはそや過る比になむしと、にぬれにぬれて旅屋の火桶に衣あふりなど物憂き旅も誰にか、こたむおのかこ、ろからにこそ

四日ゆる、かに宿をたちいて、尼かさきを過て難波にかへり着しは未のころにもや有けむ

五日けふは一日休らひてきのふの須磨の記なとかきつくあすは此町に入札有とていへのうちの人ら其まうけなと事しけきさまなり

六日けふ此伏見町に入札てふ事有けりこは都にも江戸にもなく此難波にかきれるよしもとより此町はそのなりはひ人のみ軒をならへて住ひせればにや東西の木戸をとさし往來の人をと、めておほやけにうたへてとりおこなへるさまいとおこそかなりこは誰にてもあれ茶の調度うらまくおもふ人あるときには此町の人らか、つらひそのぬしの心のまにく、此いれふたにもとりはからふ事なりとおのれらか宿りたる家も此町にては二人に数まへらる、あるしなれば家居も広うすみなせるか母屋はなちていたらぬくまなく広きは屏風かへしろなどにてさまくにとりかこひ数くむしろをしつらひ置いていとめるうま人の日比したしくすめるかきりをそのむしろ毎に招きつとへてさかなとりくまつかはらけす、むめりさて外に札もとてふ所有てそこにはか、つらふ人多くつとひみて其うらんする調度をくり出し五くさあるは七くさなと人にもた、しめてその家くの席毎におくりて見せぬその度毎に札筒をそへたりまらうとうち見て心になふ品あれはおもふ価をかき付て札筒にをさめて廻す跡より又同しさまに打かへくよき程にもてきぬれはまらうともつれくならずいと興ありか、るうちに先にぬくれる器共ははや札ひらきしてそのおちふたを告來る使声いとをかしう高らかによひなせるこも又一ふしものなりきおのれらよきをりに宿りあひぬれは何求ねともまらうとのむしろにつらなりて只見給へ稀にはをかしきものもありなむなどあるしのせちにす、むるま、に一ところのむ

しろふさきてまらうとかほに一日見つるはいとかたはらいたきわさなりけり中にはひたふるの世捨人も心うこめくえたへぬ茶碗など有つるかするすもやくなければこゝにもらしつあはれさのみおほからすともこかねをふところにして見ましかはいかに楽しき事にかあらむと返すくも思はる宗理は此道の人にしあれとも世をのかれしうへはとてさのみ心にもかけぬなめり調度の数おほくして夜にいりてもいつはつへうもあらずねふたく成にたれは例の二階にいきておのはねにけり夜明けてきけは暁方にやうくをはりぬといふ
七日よへのつかれにいへのうちの人ら能寝たり此程あるしのみつからかける鶉の絵に讚せよとこへるま、によみてかき付ぬ

うつらなく秋の末野のなか／＼にとひきてみれはおもしろき哉

八日箕面山の紅葉大かたよかめり滝見かてらおはせよとあるしせちにす、むるま、にあないの人にいさなはれて朝とく立出ぬなにはよりは五里とそいふなる十三川神崎川ふたつのわたりをこえて午の比にもや有覧かの山にいたり着ぬ山は岩かねそひえてこよなうけしきよきに紅葉いとおほうしてこと／＼にそめ尽せれば山はた、にしきにつ、めるやうなり

嬉しくも我はきにけり箕面山紅葉はけふをさかりとそいふ

(以下次号)